P-313

看護師及び受付事務業務改善がもたらす外来待ち時間の短縮効果

仙台赤十字病院　事務部　人事課

○矢部（やべ）　由春（よしはる）、菊池真紀子

【はじめに】外来診察待ち時間の短縮で着目したのが、受付から採血までの時間である。外来予約オーダーを活用して、看護師と受付事務が連携し、運用を変えることで業務改善を図ったので報告する。
【調査】平成22年11月第2週の5日間で受診した患者数は延4,332名であった。その内、午前受付の際に順番待ちをしていた患者は511名であった。1日平均約100名の患者が受付時間前から順番待ちをしていたことになる。その中には、予約をしているにも関わらず、順番待ちをしている患者が多くいることがわかった。
【現状】腎血液内科では、順番待ちをしている患者の内約80％が予約患者であった。その理由は、日付指定だけの予約であるため、同日の予約患者の間で早い順番を取り合うことであった。腎血液内科では、患者受付後にカルテを用意し、患者が外来に到着したのを確認してから採血の実施オーダーを入力していたため、それらの作業に係る時間も待ち時間となってしまっていた。
予約診療にも関わらず、運用面で問題があり、予約診療と患者サービスにうまく結びついていないことがわかる。
【取り組み】外来予約オーダーを活用することによって、翌日来院予定患者のリストを作成し、事務がカルテを前日に用意し、採血予定のある患者は看護師が採血の実施オーダーを入力しておくよう看護師と事務双方の運用を変更した。
【結果・考察】受付から採血開始までにかかる待ち時間は、平均16分短縮することができた。患者待ち時間は病院にとっての難題ではあるが、高額なコンピューターシステムを導入するだけではなく、業務フローを変えるだけでも目に見える結果を得られた。

P-314

手術センター運営の効率化を目指しての手術中止理由の調査

武蔵野赤十字病院　看護部（手術センター）

○落合（おちあい）　美歩（みほ）、篠　美香子

【はじめに】当手術センターでは、15の診療科の手術を9部屋（そのうち眼科専用部屋1室）で行っている。各部屋を有効に使用するために、各診療科から1週間分の予定を前週に提出してもらい翌週分の予定組みをしている。しかし、予定組みをした後に何らかの理由で中止や延期になってしまうことが多々あり、手術室に空きができることがある。そこで、今後の手術を円滑に行えるようにどのような理由で中止や延期になっているかの調査をすることにした。
【目的】予定した手術を中止した理由を明らかにし、手術センター運営の効率を高める。
【方法】平成22年1月～平成22年12月までに申し込まれたうち、手術日までに中止となった手術件数とその理由を調べる。
【結果】全手術申込件数5858件（眼科は除く）のうち、310件の中止があり、全体の約18．9％を占めた。中止理由は主に患者の身体状態、患者・家族の都合、医療者の都合であった。
【考察】中止理由を大きくまとめると患者の身体状態、患者・家族の都合、医療者側の都合であった。患者の身体状態による中止理由の中には発熱などの突発的変化の他、血糖コントロール不良など持病のコントロールが手術日に間に合わないこともわかった。術前の準備期間は各科それぞれであり、直前転院が多いことも影響しているのではないか。患者・家族の都合の中止理由の中には治療方法を変更したいなどの理由があったが、治療方法の幅の広がりと患者・家族が治療の選択をしやすくなってきたということも考えられる。
【結論】中止理由はさまざまであったが、理由を分析していくことで今後の予定組みをスムーズに行えるようになるのではないか。

P-315

変則二交替制導入までの過程

北見赤十字病院　看護科

○安藤（あんどう）　恵美（えみ）、福島恵美子、渡邊　裕美

【はじめに】当看護部では当院の赤字経営脱却に向けて方策の一つとして、また、スタッフの休日を保証するために変則二交替制（以下二交替制とする）導入を計画した。当病棟（婦人科、泌尿器科、頭頸部耳鼻科の混合病棟60床、固定チームナーシング）が試行病棟となり、半年が経過した。そこでこれまでの二交替制導入の経過を報告する。
【経過】アンケートではほとんどのスタッフが二交替をやってみたいと回答した。この結果を受け平成22年度の病棟内の係りに、二交替業務を検討する「業務委員」を設け、チームのサブリーダーをそれに当てた。まず、各勤務帯での業務内容を業務委員、係長が中心となり検討し、その後各チーム会にて検討し、リーダー会に結果を持ち寄り病棟会で決定をした。夜勤帯での業務を出来るだけ減らし、クラーク、助手への業務移行を進めた。二交替実施後は毎月問題点を各チームから出してもらい、業務委員、係長で検討した。
【アンケート結果】二交替制の継続に関しては80％以上のスタッフが継続すると答えた。仮眠は80％のスタッフがあまり取れない、または取れないと答えている。意見として、三交替よりも自分の時間が確保できる、休日が増えたように感じる、と言う肯定的意見と、こんなに働いているのに手当てが減った、朝方思考力が低下するという意見もあった。
【今後の課題】仮眠時間の確保と日勤務者の休憩時間の確保、日勤リーダーの業務軽減などがあげられる。

P-316

滅菌梱包ベルトの導入～ストレスとコストの検証～

伊達赤十字病院　看護部

○碁石（ごいし）　久（ひさし）

【はじめに】当手術室ではコンテナを滅菌する時、布製の用布と市販の高密度ポリエステル織物製の用布を2重梱包している。従来コンテナの滅菌・運搬は布製のヒモで縛っていたがオートクレーブでの劣化により、搬送中に断裂する場合もあった。そこで、市販のベルトを応用できないかと考え、1年前から重いコンテナを滅菌梱包する場合に、数本試験導入した。本格的導入を目指して作業時間やコスト面から検証したので報告する。
【研究期間・目的】期間：平成22年4月から平成23年4月対象：スタッフ9名方法：ベルトの安全性・機能性・経済性を検証目的：ベルトの導入が、作業の円滑化と効率化となる
【結果・考察】コスト面では作業時間の短縮がみられ、年間のTKAの件数で割り出すと約10時間の梱包作業の短縮となった。また、効率的にベルトと併用することで、滅菌用テープを多用せず、年間約26,000円のテープ代の削減となった。従来の滅菌梱包方法と比較しても耐久性や安全性では問題はないと判断する。ベルトは機能性も十分高く、重いコンテナを何台も梱包することでの身体的なストレスを軽減できたと考える。
【おわりに】毎日の多忙な業務の中での梱包作業は精神的・身体的なストレスとなる。H22年のTKA・THA・人工骨頭の総件数は91件、4日に一度はコンテナ梱包作業を行っていることになる。「カイゼン」という言葉が世界的に注目を浴びている昨今、1分・1秒をカイゼンすること、1cm・10cm単位でカイゼンすることが1年間では膨大な数字となる。たかがヒモ一本でストレスとはおおげさと感じるかもしれないが、このベルトの導入が必ず看護師の負担軽減になると確信している。